

広汎子宮全摘術の更なる改良を目指して

(文責：産科婦人科 万代昌紀)

当科では藤井教授の着任以来、子宮頸癌の根治術式である広汎子宮全摘術の改良を目指して、さまざまな試みを行なっている。広汎子宮全摘術はもともと 当科の岡林秀一元教授によって確立された術式であり、現在まで子宮頸癌 I-II 期症例の標準根治術式として国内のみならず、世界的にも広く普及している。その特徴は、骨盤内の解剖に基づいた合理的な操作の進め方にあり、その後、いくつかの改良が加えられたが、基本的な概念は今でも変わっていない。しかしながら、このような優れた術式である広汎子宮全摘術にも幾つかの問題点があった。そのひとつは時に認められる大量出血であり、これは主に基靭帯、および膀胱子宮靭帯を一括して処理する際に見られた。基靭帯処理に関しては、その後の改良によって靭帯内の血管を1本1本露出し、結紮することで出血が回避されるようになったが、膀胱子宮靭帯の処理には盲目的な要素が残されていた。そこで当科では膀胱子宮靭帯の処理をその表層から血管を分離しつつ丁寧に操作を進めることで出血量を大幅に減らすことに成功した。その結果、手術困難な症例においても、ほとんど輸血せずに手術を行っており、10年前は同術式の平均出血量 1,659g であったのが、H15年度では 327g と著明に改善している。広汎子宮全摘術の第二の問題点は、手術に伴って膀胱・直腸の支配神経を損傷することによる術後の機能障害であるが、これに関しても当科では神経を温存する手術を試み、障害を減少させている。このように、当科のオリジナルな術式である広汎子宮全摘術であるが、その原理原則に基づいたうえで、さらに現代的で安全な術式の確立を目指し努力している。